

## [制作記録]

## 波流彩文 ―泥漿鑄込みと色泥漿による加飾技法研究―

Ceramic Artworks with Colored Waves:

Decoration Technique for Clay Works Using Colored Clay Slurry

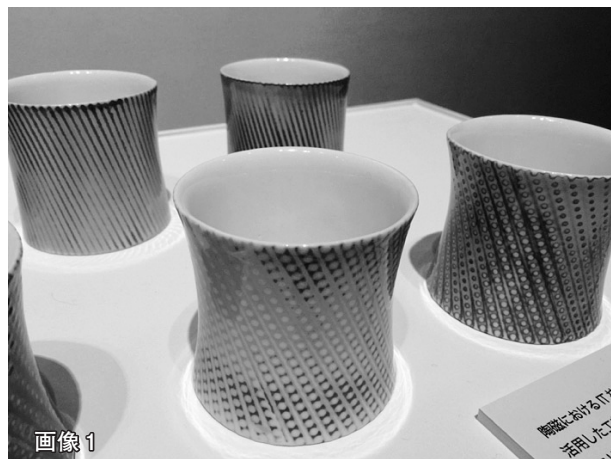
池田 晶一  
IKEDA Shoichi

## 1. はじめに

焼き物で色土を用いた加飾技法には、色土を混ぜる「練り込み」、異なる色のドベ（泥）や泥漿を素地にかける「化粧掛け」、化粧掛けの土を削り取る「掻き落とし」、色土を溝に埋め込む「象嵌」など、土の状態を様々な活用した技法がある。

色泥漿による加飾技法の研究は、泥漿鑄込みの素地の表面にレリーフ模様を施し、レリーフの溝に色泥漿（クリーム状の粘土）を複数回掛け、掻き落としなどの技法を用い、作品表面上に移ろい変化する独自の色彩の世界を試みたものである。

制作の前段として、『陶磁（工芸）におけるIT技術の活用の可能性』『金沢美術工芸大学 紀要 No.60』の、3Dプリンタで作成した原型を用い、生素地上に色泥漿を吹き付け、拭き取ることによって複雑な色を得られた技法の研究がある。画像1はその成果物。



画像1

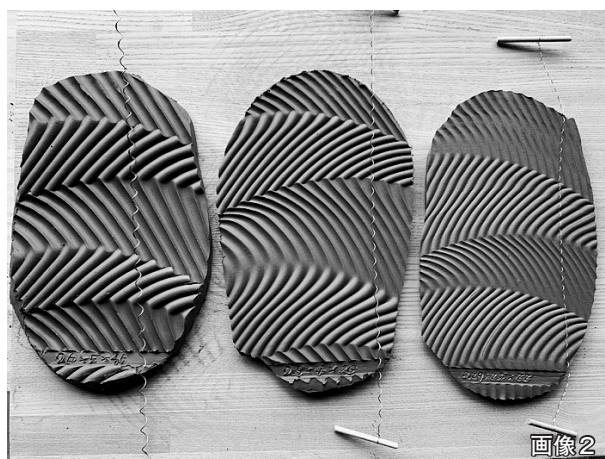
波流彩文は、これを発展させた物で、色の雰囲気と模様により大きな変化を追求したものである。

次章では、その制作過程を紹介していく。

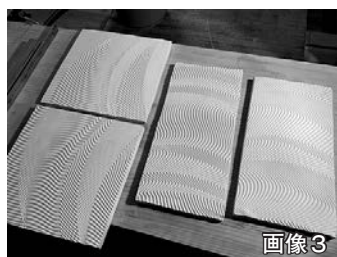
## 2. 波流彩文の作品制作

## (1) 波紋の作成

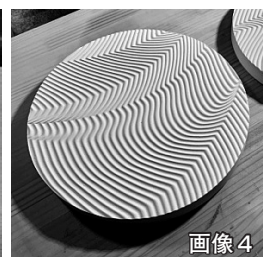
波流彩文の作品は、まず波紋のレリーフを作ることから始まる。画像2は、粘土をコイルのワイヤーを左右に動かしながら切ったもの。コイルの太さと切る時のワイヤーの動かし方で、波の表情に様々なニュアンスを与えることが出来る。



画像2



画像3

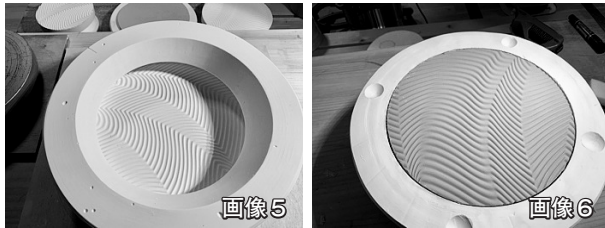


画像4

画像3は、粘土板から模様を石膏に写し取ったもので、これを基に波模様の原型を作成する。

画像4は、実際の作品の基になる石膏原型である。

## (2) 石膏型～鋳込み



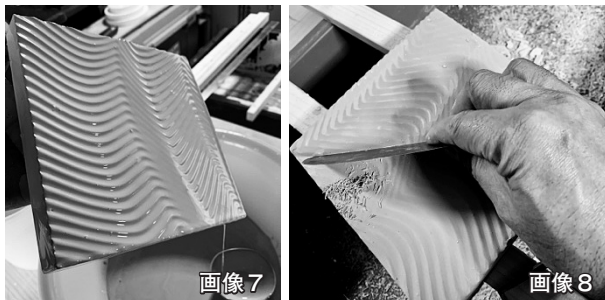
画像5は原型から起こした石膏型。

石膏型の中に泥漿を流し込み素地を成形する。

画像6は石膏型から泥漿鋳込みで成形し、素地を型から外す前の状態のものである。

鋳込みで使用する土はニューボーン（73号・ヤマカ陶料製）で、水ガラス（ケイ酸ソーダ）と水で泥漿（クリーム状の流動性のある粘土の状態）に調整する。

## (3) 色泥漿掛け～削り出し



石膏型から素地を取り出した後、生乾きの状態で色泥漿（泥漿に色顔料を混ぜ調整したもの）を掛ける（画像7）。素地に泥漿をかけると、素地は水分を含み柔らかくなってしまう。その都度乾燥し適度な状態にした上で、2色目、3色目の泥漿を施す。制作した作品には、3色及び4色の泥漿が掛けられている。

素地をゆっくり歪まない様に乾燥し、完全に乾燥した状態で刃物を用いて表面を削ってゆく（画像8）。この時、層になった土の下の色が少しずつ削られ出てくる。泥漿を施した時の泥漿の濃さや、か

かった時間によって色の層の厚みが変わり、また削り方やその深さによって模様の現れ方が異なる。

同じ形で、同じ種類の色の泥漿を掛けても、1枚ずつ異なった雰囲気となる。生素地の状態では色味は淡く粉っぽい状態であるので、焼成した後の色味を想像しながら削りを進めてゆく。

## (4) 素焼きと水研ぎ

素焼きは900度で行い、その後に素焼きの素地を耐水ペーパー（800番）で水研ぎする。焼成前の仕上げの状態では、表面を削った刃物の跡が残っていたりする為、滑らかに表面を仕上げる。

## (5) 本焼きと水研ぎ～完成

本焼きは酸化焼成、1230度で行う。

画像13～17の作品は、釉薬を掛けずに焼成（締焼き）している。表面を平らにする為に表面を棚板の上に下に向けた状態で乗せて焼成する。

本焼きで一応完成であるが、釉薬を施していない為に作品の表面にざらつきが残る。そのざらつきを取る為に再度耐水ペーパー（800番）で水研ぎを行い完成となる。

画像18、20～21の作品は器として使用する。汚れなどを防止する為に透明釉（ボン20・ヤマカ陶料製）を施した。

画像19は、鋳込んだ素地に化粧掛けなどは行わず、波状レリーフの凹凸をそのままに油滴天目の釉薬を施し焼成したものである。

## (6) 波紋の立体への展開

制作工程が前後するが、画像18～21の作品制作で、(1)の波状のレリーフを立体的、なおかつ曲面に構成する必要がある。平面への展開であれば、波状にコイルのワイヤーで切断した状態で型を取ることが出来る。箱のような形状も面を組み立てる事によって作ることが出来る。今回制作した器は、筒状である為、画像9～11の様に波状のレリーフの粘土板を固定し、石膏を流し込んで形を取った。

画像12は、完成した石膏原型である。



画像9



画像10



画像11



画像12

### 3. 移ろう色を作る為に

空の色はいつも虚で取り留めがない。特に夕日が沈んでゆく時間は、宇宙へと繋がる空の青や夕焼けの朱、太陽の輝く黄色い光、それらが流れる雲や地面に反射し、言葉では表現し難い様相をみせる。雲が風に流れ、刻々と移り変わってゆく空っぽの空は、多くの人が心の中に何かを見る様に滲み入る。

ここまで、作品の制作技法に関してその過程を述べてきたが、刻々と変化する空の虚な色や空気の流れ、それがこの作品で現したかったことだ。

形の中に取り留めのない色の変化をどのように閉じ込めることができるか。この作品以前は、作品の表面は数学的に構成できる波模様などを使用し制作していたが、自由にコントロールする線を用いたことは今回が初めての試みであった。波状のレリーフを作品の表面に構成し、尚且つレリーフの凹凸を利用し、色と色が、空の色と雲の色が鮮やかなまま混ざり合うように、作品に取り組んだ。

### 4. おわりに

波流彩文に関して、その制作方法と作品に現わそうとしたものについて述べてきた。

全てではないが、工芸のものづくりでは、表現しようとするものが、いろいろな素材の理解と探求の中で行われる。今回、作品の表面上に作り上げたかった色彩に関しては、それまでの経験と素材実験的な試みの中で蓄積を重ねて出来上がった。

まだ、私の頭の中にあるイメージまでは距離があるが、制作を進めながら現在も進行形でそれを追求している。

今回の作品は、以下の展示の機会に発表を行った。文末ながら、関係者の皆様に謝辞を申し上げます。

#### 展覧会データ

- (1) 個展 光と影の移ろい ～波の中にそれを見る～  
・ガレリアブント<加古川> 2021年10月28日～11月7日  
・ガレリアブント神戸<神戸市> 2021年11月6日～14日
- (2) 令和3年度教員研究成果発表展 2021年11月30日～12月12日<金沢21世紀美術館市民ギャラリーA> 画像18、19のみ出品

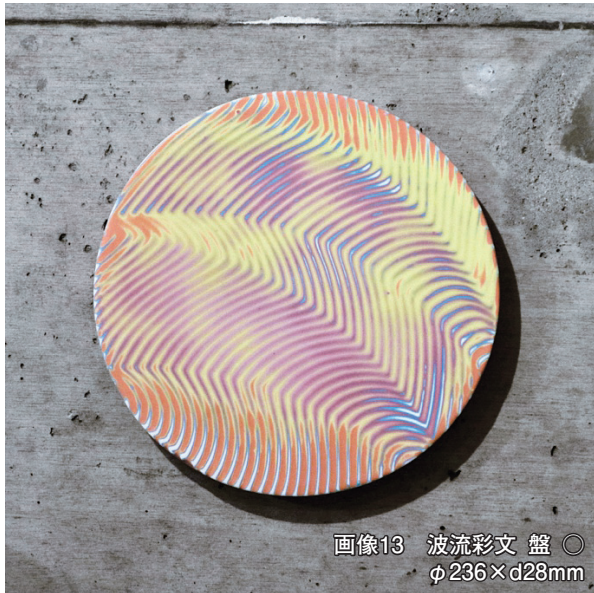
### 附記

本論文は令和3年度基盤研究の成果の一部である。

### 参考文献

- 「陶磁（工芸）におけるIT技術の活用の可能性」『金沢美術工芸大学 紀要 No.60』池田晶一・金沢美術工芸大学・2016・pp.113-122
- 「工芸領域におけるIT技術活用の可能性」『金沢美術工芸大学 紀要 No.62』池田晶一・金沢美術工芸大学・2018・pp.95-103









画像18 器 波流彩文 Tableware Wave and color  
φ 116mm×h97mm, φ 116mm×h97mm, φ 95mm×h137mm, φ 77mm×h73mm, φ 74mm×h265mm, φ 82mm×h305mm  
ニューボーン（磁器）、顔料、釉薬、泥漿鑄込み、色化粧



画像19 器 波流陰翳文 Tableware Wave, light and shadow  
ニューボーン（磁器）、釉薬、泥漿鑄込み





画像20 波流彩文 茶碗



画像21 波流彩文 カップ

(いけだ・しょういち 工芸専攻／陶磁)  
(2022年11月8日 受理)